

○東京地學協會と地質調査所の震災 大正十二年九

月一日の地震は日本の歴史時代に起つた大震中に比類を見ざる損害を起したことは今更いふを要せぬ所であるが、我々が本誌の發刊に當つて第一に記載せねばならぬ事件は此の兩機關の罹災である。明治十二年創立に係り四十五年の歳月の間に故北白川宮殿下、閑院宮殿下御主裁の下に斯學の木鐸として東亞地學界を指導し來り、會員の協力によつて宏壯の會館、豊富な書庫を有する外に報告雜誌書齋を刊行したのに、其の京橋區西紺屋町十九番地の會館と共に收藏の内外圖書を初め新刊の南北支那地質圖の如く他に求め難い貴重な出版物を灰燼に附したのは眞に痛切に堪へぬ。

地質調査所は同じく明治十二年創設以來今日までに帝國領土内の地質調査事業を行ひ、其の第一期二十萬分一地質圖幅を完成し、今や七萬五千分一圖幅の調査に着手し、海外に派遣せる所員の收蒐せる材料も非常に多く、其の陳列館所藏の標本の如きは東亞地質學上の唯一品たるものを集め、書庫には世界地質調査所出版物で日本の他の圖書館には全く求め難いものを網羅したのである。然るに是又全く灰燼となつた。

此の兩大機關の災害の斯學の損失たるや、單に我々日本の斯學に従事するもの、厄難たるに止らずして、世界學界の容易に恢復し得ない所のものである。

東京に於て唯だ帝國大學地質學鑛物學地理學の三教室が一棟の厦屋全く損を被らなだここのみが不幸中の幸で、五十餘年の災厄を免れた譯で、我々斯學者の同慶に堪へぬ次第である。

○我國の基線測量

基線測量とは云ふまでもなく三角測量の基線を測量することに於て、平坦にして堅牢なる地を選び基線尺を用ひて最も精密に其長さを測定し以て三角形の既知の一邊に供するものである。故に基線測量は一國の測地事業中最も重要なもので一寸一分の誤差あるを許さない。何となれば基線測量にして若し誤差ある時は所謂毫釐の差は千里の違さなり如何に他の測量を精密に爲すも益なきことなるべきであるからである。本邦に於てこの基線測量に用ひる基線尺は、明治十年頃米國より購入せるもので、端尺式と稱する水銀寒暖計を附着してゐるものであるが、長さ四米直徑九耗の圓き棒で、測量の際には其三本を用ひ順次接合して長さを測るものであるが細い棒であつて熱を導くこと早く膨脹收縮しやすうから、測量に當つては一回は午前温度の昇る際に於てし一回は午後温度の降る際に於てし、以て温度より生ずる誤差を彼是消却してゐるので、明治十五年以來これを用ひて全國に互り左の十九ヶ所に於て測定された。但し遺憾な事には本基線尺は購入の際米國の基本尺と比較したる以來多年來突の原器と比較するの期がなかつたのであつたが、明治四十一年壁間の基線測定に際し、間接に比較檢定をしたこの事であつて、我國の三角測量の精度は世

界各國に於て和蘭、普魯士について第三番だとの事である。序に左表は陸地測量部の野坂講師の好意によつて、之に之を掲記し得たことを附記する。

年 度	位 置	長 程	誤 差
明治十五年	相模國高座郡相模原	3209.9697	± 0.00293
同 十六年	遠江國敷地郡三方原	1033.7698	± 0.00697
同 十八年	近江國高島郡舞庭野	3065.7289	± 0.00077
同 二十年	阿波國阿波郡西林村	3832.2124	± 0.00163
同二十一年	伯耆國久米郡天神野	3301.8051	± 0.00089
同二十二年	筑後國那非郡久留米	3161.0071	± 0.00169
同二十五年	大隅國肝屬郡笠野原	5375.5088	± 0.009 2
同二十七年	羽前國最上郡山野原	5129.5872	± 0.00187
同二十九年	信濃國上高井郡復坂	3291.9120	± 0.00074
同三十一年	陸奥國三戸郡鶴見平	4006.0809	± 0.00033
同三十三年	石狩國札幌郡札幌	4239.7703	± 0.00143
同三十六年	根室國日梨郡薺別	4069.8502	± 0.00039
同四十年	北見國宗谷郡整間	2667.5083	± 0.00040
同四十四年	琉球國中頭郡沖繩	4151.6778	± 0.00041
大正二年	千島國紗那郡撈提	4103.6081	± 0.00079
大正三年	臺灣、室蘭	計 算 中	
大正三年	臺灣、埔里社	計 算 中	
大正五年	臺灣、鳳山	計 算 中	
大正十一年	樺太、大谷	計 算 中	

(藤田)

○臺灣人口増加の趨勢 大正十一年十二月三十一日の本島現住人口(蕃地にある生蕃人を含まず)は、三百八十二萬千五百二十八人にして前年に比し七萬三千一百一十一人即ち千に對する一八、七人を増加せり。此の増加率は既往に比すれば高率の部に屬す即ち、第一次臨時戸口調査を施行したる明治三十八年以降各年の増加は下に詳細表示するが如く、明治四十三年乃至大正二年の増加殊に多く、就中四十四年に於て其前年に比し千に對する二一、七人を増加するを増加の最たるものとす、而して同年以後の増加は漸次に低下し、大正五年以後は一高一低規律を缺きしも要するに千に對する一五人に達することなかりしに大正十年に至り同九年に比して一躍二一、二人の高率を示し、實に同年を以て四十四年に次ぐの増加とす。而して其次年なる本年の増加は一八、七人にして右明治四十四年及大正十年の外大正元年の一八、八人及同二年の一八、二人に次ぎ各年中第五位の増加率たり。各年の事實下記の如し。

年 度	人口千人	増加に對する比
明治三十八年十月一日	3,035,751	100
同 三十八年十二月末	3,046,859	100
同 三十九年十二月末	3,080,545	101
同 四十年十二月末	3,108,733	102
同 四十一年十二月末	3,133,355	103
同 四十二年十二月末	3,161,051	104
同 四十三年十二月末	3,339,121	106

同 四十四年十二月末	三、二八八、式七九	一〇八	六九、七六六	三、二七
大正元年十二月末	三、三五三、九四三	一一〇	六五、〇六四	一九六
同 二年十二月末	三、四一八、二七〇	一一二	六四、三七七	一九二
同 三年十二月末	三、四六六、七一九	一一四	五〇、四四九	一四八
同 四年十月一日	三、四七九、九三三	一一四	一一、一〇三	三、二
同 四年十二月末	三、四八三、二六六	一一五	三、三四四	一、〇
同 五年十二月末	三、五〇一、一〇〇	一一五	二六、六四四	七七
同 六年十二月末	三、五〇〇、〇五〇	一一七	四九、九四〇	一四、二
同 七年十二月末	三、五八三、三五五	一一八	二三、四四五	六、六
同 八年十二月末	三、六〇〇、三六五	一一九	四六、九九〇	一一、一
同 九年十月一日	三、六五五、三〇八	一二〇	二四、九三三	六、九
同 九年十二月末	三、六七三、二九〇	一二二	一七、九八二	四、九
同 十年十二月末	三、七五二、二二七	一二三	七七、九三七	二、二
同 十一年十二月末	三、八二二、五五八	一二六	七〇、三三一	一、八

右増加の原因は死亡に對する出生の超過即ち自然的原因と轉出に對する轉入の増加即ち人為的原因とあり然れども其主要なるものは自然的原因に由る増加にして本年の事實に就て之を見るも、轉出は二十一萬三千餘人、之に對する轉入の超過は僅に三千八百五十四人即ち千に對する一、〇人に過ぎざるに自然的原因を見れば出生は十六萬千餘人死亡は九萬五千餘人にして出生超過六萬六千四百五十七人即ち千に對する 七、一七人に及べり。

○福井縣の水産狀況 (大正十二年度)

○一月蟹鱈を主要漁獲物とす、一艘曳機船手續は一日、一航海百圓内外を收穫す、當敦賀灣内に小鰻の漁獲あり。

- 二月、蟹鱈前月に比し不況となる。二月二日若狭方面松ヶ崎沖合四漕にて鰻流網漁業を始め荒天多し出漁日數少し。
- 三月、鰻の豐漁期に入り距岸三漕乃至五漕の沖合に於て坂井郡方面盛漁を報ず最高漁獲一隻六萬尾を達す。
- 四月、鰻は漁期漸く終り鰻の豐漁期に入る距岸二漕乃至四漕の海區にして丹生郡四ヶ浦の如きは一航海八百尾を得たるものあり、この月若狭方面小濱高濱、和田の定置場にて柔魚の大漁あり。九頭川の鰻の漁期に入る、大正十年度に年産十萬圓の漁獲ありたるも本年は僅に四千圓の不況なり。
- 五月、縣下一般鰻漁不況に陥り漁場は遂に沖合に移動し沿岸を去る十漕内外、水深二百四十尋位の所に移る、但し三方郡山東に於て豐漁あり一日二萬乃至三萬尾を得たり、鰻は一般に終期に入る。時に敦賀方面にて鰻魚の漁獲あり、柔魚の中方青あれいかば越前沿岸定置漁場に於て大漁あり。
- 六月、体重三十貫の鮪沿岸に來る夏大罾網にて漁獲をばじむ本月に入り鰻の漁況好轉し沿岸各地好漁一隻千尾を算す或は四千七百尾を漁獲したるものあり。
- 七月、上旬鰻の終期に入る、鰻、柔魚何れも相當の漁獲あり惣田鰻下旬より魚影を認め近時稀に見る大漁あり一日四萬尾を獲たる漁場少なからず。
- 八月、本月も亦惣田鰻の好況を失はず、丹生及南條郡の如き七月下旬より八月上旬までの間に七十八萬尾を獲たり、鰻、柔魚、鯛いづれも不況なり。
- 九月、鰻は縣下一般に不漁を示せるも下旬に入り三日間大漁

ありたり柔魚中旬以後稍好漁となれるも、鯛は一般に不況なり。

○十月、蟹は九月下旬より漸次漁獲あり十月中旬以後好漁となる、鯉も同様に漁期に入りたる。下旬に入り好調なり、柔魚丹生郡にて稀なる豊漁あり十湊内外の沖合にて一艘一航海四百五十尾を獲たり。

○十一月、鯉の好期に入り一艘曳發動機手繰に依り最高一日航海二百貫二千尾百五十拾四を漁獲あり、蟹も亦上旬好漁を示せり、あから、たら、ふくらぎ等相當に漁獲あり。

○十二月、蟹及鯉の漁期なるが相當の漁獲あり鱒これにつぐ、鱒は本年不況なり。(福井驛水産試験場報告)

### ○大正十年度内に於ける國有鐵道の改善

大正十年度鐵道省年報によれば同年度内に於て列車運轉上施設されたるもの左の如し。

一、大津京間並桃山京都間變更線路工事竣成の期とし、八月一日より東海道關西線列車運轉時刻を改正し、且之に伴ひ山陽線北陸線、讃岐線等の列車運轉時刻を改正せるが、抑も京都大津間は舊線路に比し其距離に於て二哩り分を短縮し且句哩を緩和するに至りたるを以て旅客車に於て十分乃至十五分貨物列車に於て十六分乃至二十二分を短縮し、殊に急行列車は新造大形機關車を使用し、特急にて東京神戸間は一時間餘、急行車にて最大五十分を短縮するを得たり。

二、信越線横川輕井澤間に於て五月十日より從來貨物列車に蒸

氣機關車を使用せるを電氣機關車に改めたる結果、該區間に於ける運轉時刻の改正に伴ひ貨物列車一往復を増加するに至れり三、北海道名寄線上興部間新線開業に依り、名寄線全通のため網走線と宗谷線とを連絡するに在りたる結果、函館網走間に於て名寄を經由する方、十里餘を短縮することとなり之を以て北海道全線列車の系統を整理し時刻を改正せり。

因に大正十年度に於ける國有鐵道線路の延長は六千七百二十二哩二一鎖なるが機關車三千五百十八輛客車八千五百七十五輛貨車五萬二千四百九十二輛を算し、何れも前年より増加の勢にあり蒸氣機關車の走行哩は九千五百五十五萬九千三百〇四哩に達し電氣機關車(主として東京横濱間)の走行、二十八萬哩、旅客四億五千四百五十三萬五千九百一十四人貨物五千七百三十九萬四千〇二十九噸を算し營業收入三億九千七百五十九萬九千四百九十四圓なるが、營業費、差引して營業益金一億七千八百九十四萬九千〇八十九圓に達せり。

### ○陰陽線の聯絡

山陰線と山陽線と聯絡する山陰線三保三隅、石見益田間(十三哩六分)は大正十二年十二月二十六日午前五時四十二分三保三隅驛發同五時五十二分益田驛發列車から開通し茲に山陰線は小郡まで全通陰陽線は完全に聯絡した、陰陽聯絡の使命を帯びた山陰線は明治三十三年五月伯爵國鐵の起工に初まり、三十六年之を山陰縱貫線に改め、二十一年十二箇月の日子と三千四百八十九萬三千餘圓の工費を投じ、今回三保三隅石見益田間の十三哩六分を加へて福知山以西二百五十四哩の

完成を見ることゝなつたのであるが京都を起點とすれば三百六十四哩一分で小郡驛に於て完全に山陽線と握手したのである、それで従來播但線經由で下關に出た山陰人や、山陽線中部以西、九州及朝鮮地方からの山陰旅客は小郡より直ちに山陰に入る事が出来、近畿以東から山陽經由で富島、廣島等に遊び出雲大社に参拜するものは小郡より直ぐ山陰に入る事が出来播但線は大迂回する必要がなくなる。次に物資輸送上の影響を見ると従來松江は石西地方に對する日用雜貨の中繼地となつて居たから全通と同時に更に西部へ取引區域の擴張を見ると共に、一方下關九州地方よりも少なからず物資が東漸して來る事となり。將來山陰地方於て東西商品の競争が起るのは明かである。

従來山陰地方へ供給せられる石炭は門司から海運により萩、温泉津、濱田、境港等へ陸揚せられしが消費地へ陸送せられて居たのであるが今後は鐵路小郡を経て消費地へ輸送せられ關門積出の山に行き肥料、雜貨亦同の徑路によつて陸送せられ、大坂京都よりの下り貨物も線路が延長すれば輸送の量を増し斯くて山陰線による物資の輸送が増加するの事は明かである。(十二年十二月廿一日)

### ○九州一周鐵道完成

日豊北線重岡市柵間延長三十六哩四鑽の鐵道は工費壹千九拾萬圓、入夫九十萬人、六月七年有餘を費し、完成大正十二年十二月十五日其の開通式が行はれた。新鐵道は宮崎、大分兩縣の連絡以外に九州一周環狀鐵道の完成といふ重要な意義を有して居る。即ち九州一周四百七十一哩

の中三十六哩の重岡市柵間未開通が運輸交通上の大障害となつて居たが日豊線の開通によつて之の障害が取除かれ二十三時間て完全に九州を一周する事が出来る様になつた。重岡市柵間は大正五年四月起工、海岸線を捨てて山間線を探つた爲難工事が多く隧道が四十九箇所、橋梁が四十七箇所もある。

(十二年十二月十五日)

### ○大正十二年度の貿易

農商務省の調査によれば大正十二年一月以降十二月廿五日迄の本邦(植民地を除く)對外貿易額

は輸出拾四億壹千八百八拾萬七千圓、輸入拾九億四千六百貳拾六萬八千圓、合計參拾參億五千八百七拾萬五千圓で差引輸入超過額五千四百四拾六萬壹千圓を示した、之を前年同期と比較すれば輸出は貳億貳千五百六拾四萬五千圓(一割三分八厘)を減少し輸入は五千五百九拾六萬圓(三分)を増加し結局輸入超過額は二億八千百六拾萬五千圓を激増した、重要輸出品中昨年度に比し増加した主要なるものは綿織物の壹十億五千五百六拾萬六千圓(五分七厘)、莫大小製品の四百五拾參萬貳千圓(三割)、水産物の參億九萬八千圓(二割二分)、豆類の貳億四拾五萬七千圓(五割三厘)、陶磁器の貳百貳拾七萬八千圓(一割二分八厘)、鐵製品百五拾四萬貳千圓(一割六分)、厘等であり輸出の激減したものは生糸の壹億零千七拾貳萬六千圓(一割八分三厘)、綿織糸の貳千九百四拾參萬貳千圓(二割八分四厘)、絹織物の壹千五百參拾參萬圓(一割五分五厘)、絹織電綫の六百貳拾壹萬參千圓、八割十厘、精糖の四百七拾壹萬壹千圓(一割二分八厘)、燐寸の四百拾六萬六千圓(二

割九分五厘) 屑糸及眞綿の貳百八拾五萬六千圓(二割二分五厘) 縲類の三百貳拾五萬壹千圓(二割八分六厘) 等であり、重要輸入品中昨年度より輸入の増加したものは棉花の九千零百八拾六萬九千圓(二割二分四厘) 毛織糸の貳千貳百七拾六萬三千圓(五割二厘) 羊毛の貳千貳百四拾六萬貳千圓(四割五分) 油粕の壹千貳百四拾八萬壹千圓(二割二分) 膠、硫磺、アンモニアの壹千貳百七拾一萬圓(一割一分) 豆類の九百零拾參萬四千圓(二割五分) 八厘、生薑の六百九拾參萬九千圓(六割六分七厘) 石炭の六百五拾萬七千圓(四割三厘) 鉛の百八拾九萬八千圓(二割三分一厘) 等で減少したものは、鐵の四千五百六拾貳萬四千圓(二割八分) 米及び糶の參千七百七拾九萬七千圓(五割二分三厘) 小麥の壹千四百九拾貳萬貳千圓(二割六分八厘) 砂糖の壹千參百六拾四萬壹千圓(二割三分五厘) 機械類の壹千壹百九拾參萬壹千圓(一割七厘) 綿織物の五百九拾貳萬八千圓(四割六分一厘) パルプの五百六拾四萬四千圓(五割) 毛織物の五百拾八萬貳千圓(壹割八分) 石油の四百零拾貳萬九千圓(二割五分二厘) コールター染料の參百六拾六萬壹千圓(二割八分八厘) 燐鑽石の參百四拾五萬圓(四割二分五厘) 懷中時計及び同部分品の參百四拾四萬七千圓(三割七分二厘) 紙類の貳百四拾八萬貳千圓(一割四分二厘) 等である。(十二年十二月卅一日)

○大正十二年朝鮮貿易

大正十二年中朝鮮の外圍貿易は輸出貳千四拾萬餘圓、輸入九千八百零拾參萬餘圓、計壹億壹千八百七拾餘萬圓を算し之を前年と比較すれば輸出貳百九拾壹萬

餘圓即ち一割七分、輸入貳百五拾四萬餘圓即ち三分、計五百四拾五萬餘圓にして約百分の増進を示した。而して輸出入貿易權衡に於て入超七千七百九拾參萬餘圓を計上し前年の入超七千八百零拾萬圓に比すれば多少減少して居る。(十三年一月八日)

○日阿貿易情況

日阿間の距離は歐阿間の距離より遠く多數の日子を要すると同時に運賃比較的高價であつて歐洲品との競争に頗る困難である。

珠數玉はチエコスロヴアキア及び獨逸品の輸入増加し、眞鍮製品は獨逸品の爲販路を侵蝕せられ、刷毛は獨逸品増加し、日本品漸次減退し綿製反物は米國及び獨逸品の輸入増加し日本品激減し、エナメル器は日本品の品質劣等で獨逸品の輸入が激増し、日本製絨氈は織毛抜け易く南阿人は一度の使用に懲りて再び購入しない、絹製莫大小は米國、英國獨逸品に壓倒せられつつあり、玩具類も日本品は毀れ易くセルロイド玩具を除いては獨逸製の安物に壓倒せられて居る。大正八年日本綿製毛布の輸入額は四十二萬五千磅であつたのに對して十一年は僅かに六百磅に過ぎず其の主なる競争國は自耳義、和蘭、獨逸、佛國の順序である。元來此の地の需要は土人用品であるから模様の華美なる事と値段の低廉なる事を要する、陶器にあつても近時獨逸製の安物が輸入せられるに従ひ日本品は減退した。

○地理科豫備試驗問題

大正十二年十一月 一、紀伊半島ノ自然地理ヲ述ベヨ

(十二年八月廿六日)

二、ベルギー國ノ人文地理ヲ述ベヨ。

三、北アメリカ大陸の氣候帶ヲ説明セヨ。

四、海蝕臺地トハ何ゾヤ實例ヲ本邦ニ取りテ之ヲ説明セヨ。

五、世界ニ於ケル「コム」ノ生産及ビ集散ノ狀況ニツキテ述ベヨ

六、南アフリカ聯邦ノ政體ニツキテ記セ。

七、右ノ地ニツキテ知ル所ヲ記セ。

イ、世界ニ於ケル都市密度ノ特大ナル地方五箇所。

ロ、世界ニ於ケル海ノ深サノ極メテ大ナル所五箇所。

ハ、アジアニ於ケル氣温ノ最も高キ地方ト最も低キ地方。

ニ、ロシア(Cont)

ホ、中江鎮。

ヘ、花咲半島。

右四時間。

## 新刊紹介

○「地形學」 辻村太郎著 此種の出版物は外國にも少く

特にテューイス以後の新地形學としては類の無いものであらう  
眞に良著述である實例として我國内に於ける著者自身の觀察が  
澤山あるが著者の得意とするプロック圖が一もないのは残念で  
ある。本書は地學に志す士の必ず座右に備ふべきものである。

(定價五圓五拾錢古近書院發行)(横山)

○「日本地史の研究」早坂一郎著 早坂博士は東北大

新刊紹介

學にあつて東亞地史を攻究しつつある最鋭潤たる少壯學者であ  
るから其著述たる本書の如き信頼 得るものと言はればなるま  
い。本書を一讀したる士は我國の斯學の如何に暗黒にして貧弱  
なるかを知り必ず發奮する事であらう。著者書目と多くの化石  
圖とを附し甚便利である。(定價貳圓八拾錢小西書店)(横山)

○「都市と建築」片岡安著 四六版三百八十四頁の冊

子章を分つ事十三中にも國防上より見たる都市建築の制限、我  
國都市計畫の將來の二篇は著者の都市計畫に關する根本理論を  
のべたものであつて現代の都市がいかなる性質を有せるものな  
るかを明にすると同時に我國都市改良の二大要目を詳説し大に  
積極的施設を鼓吹せるものである。しかして紐育の市勢と其建  
築なる條下に其經營振りの大規模を論じ併せて都市としての其  
缺陷をのべ、ひいて都市の衛生、生活改善もしくは、住宅改造  
に關して大體の説明を興へ轉じて都市計畫より見たる遷都論の  
章に於ては平城京、平安京東京京都等の歴史を一顧概況し大陸  
遷都論を紹介してゐる、こゝに附録として「關東大震災の被害  
に就て」なる一篇を附加して東京市の建築物が如何に不合理無  
秩序又不經濟であつたかを痛論してある、時節柄一讀をす、む  
るに足るべき良著たるを失はばない。(大正十二年十一月發行、大  
阪市民書局刊行會)(藤田)

○「自由港の考察」(内務省土木局編) 世界大戰後歐洲諸

國に於て、自由港設置の氣運生じ、既に西班牙のカデツツ、ピ  
ルバオ、バルセロナ、サンタメンダー、瑞典のストックホルム、